

〔付〕 性の解放と社会革命

五月革命が提起した問い

性の解放は、果して社会革命実現のために寄与しうるのか、寄与できるとすれば、それは社会革命にとってどのような戦略的意義を持ちうるのか、これらの問いは、積極的に解明されているとは思えないし、ほとんど無視されているように見える。性の自由化については、依然として根強い偏見が残っていて、それは単に既成の理念にすがっている一般社会のみならず、誠実に社会の変革を求めている、真面目な活動家たちをもとらえていて、彼らにとっては、個人的な愛は、止むをえない生活面での付属物か、そうでないとすれば、犠牲に供すべきものと考えられ、自由に奔放に愛欲に耽けることは、否定すべき、忌むべきもの、頹廢的なブルジョアのもの、反革命的な態度、と受け取られているように見える。しかし、自由に奔放に愛欲に耽けることは、本当にブルジョア的なこ

と、反革命的なことであらうか。自由に奔放に愛欲に耽けることを反革命的とみなす、そうした真面目な人々によって行なわれる革命とは、一体どのようなものでありうるのであろうか。そこで築かれようとする社会とは、どういう性質のものなのであろうか。それは、たとえば私が願っているように、各個人の自由な発意と同意の上に成立する、非権威主義的な社会でありうるのであろうか。しかし、どうやらそうではないらしいと感じられる、そこには何か重大な課題が潜んでいる、という疑念が私にとっての問題の出発点である。

そのように、性の解放と社会革命とのかかわりを考えてみようとする、私にはごく自然に、六八年五月のフランスの動乱が念頭に浮ぶ。異端の性科学者であり思想家であったウィルヘルム・ライヒの復権を、いちじるしく促進させたのは疑いもなく五月革命であったが、そうしてライヒ復権の一つの契機となったことから理解されるように、五月革命は、その当初から、その前史から、性の自由との関係に強く彩られている。

私は、現に五月革命についての小論をまとめようとしていて、調べを進めているのだけれども、調べてゆくにつれて、もしダニエル・コーン・ペンディットという男がいなかったとしたら、五月革命はあのような展開をしたであらうか、もっと違ったものになっていたのではないか、あるいは五月革命そのものも起らなかったかもしれない、といった思いにつかれ、ある歴史的事件の要に位置して、いわば運命的に途方もない大きな役割を果たす、そんな一個人の存在に驚かされているのだが、そのコーン・ペンディットが頭角をあらわすこととなった機会も、性と決して無縁のもの

ではなかった。

六八年一月八日、パリ大学ナンテール分校でのブル落成式の折のことである。列席したミソフ青年体育相に対して、社会学科の学生コーンIIペンディットが質問をし、青年白書の中で大臣が性や性をめぐる問題に触れていない、といって非難した。はじめ静かに答えていたミソフ氏も、執拗なコーンIIペンディットの追及をうるさく感じて、とうとう、新らしく開場したブルに潜って頭を冷やすように、と忠告した。憤然としたコーンIIペンディットは、ミソフをファッシストとして罵った。その挙句、問題は発展して、コーンIIペンディットの追放措置と、彼を擁護する社会学科学生総会の決定を招き、結局、追放措置は取消されることとなるのだが、アラン・トゥーレーヌによれば、「この事件はまずコーンIIペンディットをひどく有名に」したのであり、その後の彼の影響力の基礎を作ったのであった。

このいわゆるブル事件以前にも、五月革命の発端となったナンテール分校では、性の問題をめぐってスキャンダルを起している。ナンテールの寮の学生たちは、厳格な寮の規則を改善する闘争をつづけ、六七年三月には、その規則の最後の砦となったもの、女子学生の男子寮訪問を認めながら、その逆を禁止する条項を打破しようとして、一団の男子学生たちが女子寮に闖入し、翌日まで出てこないという事件を、二回にわたって故意に起した。これは、性の自由の要求であるとともに、寮内での学生自治の要求であったが、この事件はスキャンダルとされ、新聞や寄席での物笑いの種となり、大統領ド・ゴールも、学生たちは、大学の設備が満足できるものとなると、今度はベ

ッドを、情婦を要求した、とのべて嘲笑したという。しかし、それは単にベッドの、情婦の要求であったのか。やがて、それが単に情婦の問題ではないことを、五月の過程を通じて、ド・ゴール自身が思い知らされることとなる。

六八年五月は、既成の社会についての、既成の権威についての、既成の知識についての、あらゆる場での壮大な告発を生み出した。そこでは、権威として強制されていたあらゆるものが、改めてみな、問い直された。そして、性の問題もまたその主要なテーマの一つであった。多くの討論の場での性に関する発言とともに、われわれは、壁に書きつけられた次のような文字を見る。

羞恥心は反革命的である。

君のズボンの前を開くように、君の頭脳を開放せよ。

セックス、それは結構なものだ、と毛沢東がいった、過ごすな、とも。

鎖を断つて楽しみたまえ。

死せる時間なく生きたまえ。

だますことなく抱擁すること。

今、ここで、楽しみたまえ。

新しい性倒錯を発見しよう。

同志よ、愛は政治学院でもいとなまれる、単に畠の中だけではなく。

愛してるわ！ おお！ 舗道の石を持ちながらそういつてくれ！

(ナンテール)

(新医学部)

(ナンテール)

(政治学院)

(ナンテール)

快楽に強制される留保は、留保なく生きる快楽を挑発する。

(ナンテール)

そして、その挑発に対しては、この種の言葉ではもっとも有名になったもの、

愛の営みをすればするほど、革命をしなくてはたまらなくなる。

革命をすればするほど、愛の営みをしなくてはたまらなくなる。

(ソルボンヌ)

が応じているのである。

さて以上私は、性の解放と社会革命とのかかわりを考える一例として、五月革命の性に関する側面の一端を紹介してみたのだが、ここでわれわれは、五月に見られた性の自由についての要求ないし讃歌は、単なる冗談ないしユーモアであったのか、それとも真摯な叫びであったのか、それは五月革命という特殊な事例に付随した例外的な現象であったのか、それとも社会革命一般にかかわってくる本質的な要素であったのか、それを自らに問うてみなくてはならない。そして、冗談ないしユーモアではなく、例外的な現象でもなく、社会革命一般に深くかかわっている、というのが私の答えである。

この私の答えを確認するものとして、私は五月に関するいくつかの証言をあげることができるが、たとえばダニエル・ゲランを引くとすれば、彼は六八年十一月二十九日のブリュッセルにおける、ライヒについての彼の講演の中で、次のような指摘を行なっている。

「ソルボンヌの壁の言葉よりも以前に、ライヒは理解しておりました、よい革命家であるためには、たくさんの愛の営みをする必要があることを(聴衆の間で、非難でない笑い)」

ここでゲランは、愛の営みをすればするほど、革命をしなくてはたまらなくなる、よい革命家であるには、たくさんの愛の営みをしなければならぬことを、明らかに肯定している。それは、五月に示されたものが、決して冗談ではないことの証左である。そして、私がかりに「愛の営みをする」と訳しておいた言葉は、端的にいえば性交渉そのものを指す動詞であって、たとえばそれは、パリの街角で娼婦が客を引く時に用いるのと同じ動詞なのであり、とすると、五月革命が性に関してわれわれに提起する問いは、要約していえば、革命をするためには性交渉を重ねなくてはならぬ、自由に奔放に愛欲に耽る必要がある、というテーゼをどう理解するか、ということになる。

これは、奇異な問いであろうか。おそらく一般には奇異と受け取られる問いであろう。愛欲への耽溺は、社会変革に集中すべきエネルギーの浪費であり、個人的なものにすぎないベッドの中の行為は、社会の構造の変化には何らかかわりを持つものではあるまい、と見るのが常識であろう。しかし、果してそうか。それは否定しえぬ常識であろうか。私はこの問題について、ゲランとライヒ——性についてまったくの素人である私に、性の重要性を教えてくれたゲランと、ゲランの紹介を通じて知ったライヒ——とを介して、さらにまた五月革命にも触れながら、私なりの理解を示してみることにはしたい。

ゲランとライヒと五月の志向

ゲランは、ライヒをドイツ語あるいは英語の原書で読んでいて、ライヒが今日の声価を得るはるか以前から、ライヒを賞讃して止まぬ人物の一人であった。それは、一九五五年刊行の『キンゼイと性』の随所に見られるし、五七年のライヒの死を悼んだ「ライヒ頌」でも明らかであって、ライヒにとってゲランは貴重な知己であったといえるが、ゲランはただ書物を通じてではなくて、直接ライヒに会つてもいるのである。一九三四年のことというから、ゲラン三十歳、ライヒ三十七歳の時であるが、その会見の模様について、例のブリュッセルでの講演の中で、ゲランは次のように語っている。

「家族たちが『ウィリイ』と呼んでいたライヒを、私は個人的に知る特権を有していた、といわねばなりません。したがって彼は、私にとっては、抽象的な、伝説上の人物ではありません。私は彼に、一九三四年に、オーストリアで、私の義母の家で会ったのです。彼女自身も精神分析学者である妻のアニーと、二人の娘を連れていました。力強いがっしりした体軀で、顔はひどく浅黒く、視線はややすわつていて、気狂いじみていたのでした……」

ゲランはさらに言葉を継いで、ライヒがアメリカに渡ってからライヒの家族との交渉などにも触れているが、しかしゲランがライヒに並々ならぬ注意をそそいでいるのは、ただそうした個人的

な接触によるのではなくて、いうまでもなく、ライヒの業績と生涯に寄せる共感のためである。ゲランが、ライヒについて特に賞讃しているのは、彼が革命的なフロイトのもっとも直接的な継承者であったこと——フロイト自身によって否定され歪曲され、現在のフロイト主義者からもほとんど無視されている、一九〇八年のフロイトの『文明化された性道徳と現代の神経衰弱』という、ゲランによれば「驚嘆すべき試論」の直接の継承者であるという点で、その立場の故に精神分析学とマルクス主義の総合者となったこと、孤独な、不遇な、悲惨な生涯を送ったことが、ゲランの心を動かさずにはいない。彼は、やはりブリュッセルでの講演で、次のように述べている。

「二つの理由が、ウィルヘルム・ライヒの声価を遅いものにした、と私は考えます。

まず第一に、彼の著作すべては、特に青年の間における、性的抑圧によって生みだされる害毒を告発しています。それは、フリー・セックスの、活気を与える、刺激的な役割を、オルガスムがもたらす安らぎを、賞揚しております。

第二に、ライヒは、フロイトとマルクスのかつての弟子であるという彼の二重の教養によって、マルクス主義と精神分析学との繋番となっていました。以前は安楽なものではなかったこの立場は、二つの教会の熱狂者たちの反撥を彼にもたらしました。しかし、今日ではこの立場は、栄光のもっとも確かな資格であります。批判的分析の中に性欲を含めることなく、人間を解放しようとし、性的な面でも人間を解放しようとするマルクス主義は、それ自身崩壊しています。社会的な関係や唯物弁証法的分析を軽蔑する、単に生物学的な、ないし単に臨床的な性科学は、真

実の半ばをしかり示しておりません。

今日の青年たち、五月の革命的な青年たちは、学派の争いにうんざりしています。彼らは、総合を、よりよく行動することを——ついに——可能とする総合を、要求しています。彼らはマルクス主義とアナキズムを和解させることを渴望していますが、まったく同様に彼らは、マルクス主義と精神分析学を結びつけようとしています。そこから、ウィルヘルム・ライヒの著作に対する、彼らの熱烈な関心が生まれているのです」

こうして、ゲランはマルクス主義と精神分析学との総合を試みたライヒを讃える。しかし、彼は同時に、ライヒに託して、自分自身を語っているようにも見える。五月革命の青年たちが、マルクス主義とアナキズムの総合を求めていたにしても、五月の過程で、アナルコ・マルクス主義を意味する、絶対自由主義的マルクス主義という言葉がクローズアップされてきたとしても、すでに第二次大戦以後、特に一九五〇年代以降、マルクス主義とアナキズムの総合を試みたのは、ほかならぬゲランであり、ライヒがマルクス主義と精神分析学との双方の正統派から指弾されたように、マルクス主義とアナキズムとの双方の正統派から指弾されたのは、ほかならぬゲランではなかったか。ライヒを語るゲランの言葉のうちには、ゲラン自身が耐えてきた風雪の日々が隠されている。

しかし、ゲランのライヒへの共感の中に、ただゲランの個人的な感懐のみを見るのは、やはり皮相に過ぎることであろう。それは、違った分野においてではありながらも、ともに同じものを目指していたものの共感、共に同じもののために闘ってきた人間同士としての共感と見るのが妥当であ

るように思われる。ライヒを正統派精神分析学とスターリン主義から遠ざけたもの、ゲランを権威主義的マルクス主義から遠ざけ、「常に現実的な意味を失わない宝庫」アナキズムに近づけたもの、そこに私は、固く共通する志向を見る。それは、自然の生命への信頼、自発性への信頼の上に成立するもの、あらかじめ設定された枠の中に人間を追い込むことの拒否であり、まったく解き放たれて伸びやかに発現する生命を基礎にして、各個人の自由な発意と、各個人間の自由な利害調整の表現である合意とによって、自律的な社会を形成しようとする志向であり、したがって、人間を解放すると称する運動の中にあるものを含めて、あらゆる形の人間に対する抑圧を徹底して排除しようとする志向である。そして、そう確認してみると、私は、その志向はまさしく五月革命の、少なくともそのもっとも先進的な部分の志向であったことに気づく。事実、それが五月革命によって志向されたものであるが故に、五月以後、特に高く再評価されている思想家の中に、われわれはゲランとライヒとの名を見ることができるのである。そして、彼らと五月革命とが共に志向したもののかわりの中でこそ、われわれは、五月革命が提起した一つの問い、よい革命家であるためにはたかさんの愛の営みをする必要があるというテーゼについて、初めて適切な判断を下すことができる。鍵は、五月が、ゲランが、ライヒが志向したもののうちにこそ見出される。

社会革命における性の自由の意義

社会的な規制や偏見による監視、そうしたもののへの遠慮や怯えを取りのぞいて、われわれがしたいことを何でもしたとすれば、われわれ各自の生命の持つ可能性は、それこそ実に驚嘆すべきほどのものであらう。われわれの生命のうちには、引きだされぬままに眠っている限りない可能性が秘められている。それはまさしく秘められていて、現実にはほとんど意識もされぬほどに抑圧されているのだが、しかし、それが奔流のように噴き出す時もある。そのように顕現するのは、あらゆることが可能だと思われる革命の日々においてであり、それは、

もうすでに十日も幸福な日々が、とか

夢に見たことが今は現実

と、壁の落書が伝えている、あの六八年五月のフランスの高揚のうちに、われわれが身近に見たものであった。

その五月革命については、あらかじめ何らの粹をも用意していなかったという点にこそ、あの壮大な劇の最大の特徴があった、ということが出来る。別な言い方をすれば、あらかじめ権威を持つものとして提示される決定はすべて拒否されて、一切は欺瞞ではない直接民主主義の誠実な履行により、社会成員ひとりひとりの自主裁決の上に委ねられようとされ、あらゆる自発性、あらゆる生

命の可能性を引きだすことが試みられたこと、それこそ五月の最大の特徴であった。それは特に、三月二十二日運動など、五月革命の中核を形成した運動の中で顕著な傾向であって、たとえば、三月二十二日運動は、あらかじめ権威とする知識を否定し、知識はすでにあるものではなくて新しく創りだすべきもの、つまり、各個人の行動決定に影響を与える知識は、外部に前からあるものではなく、当人自らが発見し、わがものとした知識であることを、きわめて明確に確認していたのである、それが彼らの、あらゆる支配や指導を排して、直接民主主義的運営を運動の中で貫いた、行動の原則の基本理念となっていたものであった。

そして、そこで確認されていたように、人間の行動は各個人がそれぞれに決定するものであって、外部には絶対の規範はない、つまり個人は各自の決定と責任において何事も自由である、と認めるのであれば、そこには性の自由という問題はない。各個人がどのような性についての行動をとるかは、それぞれに自己の生活体験の中で決定すべきことであって、何らかの拠るべき外部の基準は存在しないからであり、ある道徳的な規範が仮定されていればこそ、それに対する抵抗という形で生じてくる性の自由という問題は、起りうる筈もないのである。それは、本来自由なのであって、自由を問題にすることこそ奇妙であるといえる。誰が当人に代って、各個人の生き方に決定権を持ちうるのであらうか。神か、支配者か、官僚か、それともわれわれを無知と見なしているらしい指導者か。なぜ彼らが、そんな権利を持ちうるのであらうか。

しかし、夢を現実とした五月の過程と違って、われわれの現実には、権威として機能している知

識が蔽存している。暗黙の社会的な規制がわれわれの日常を圧している。そしてわれわれは、性欲はどこか不純な汚れたものであること、性欲の充足は社会で容認されているルールの中でのみ行なうこと、放埒な性欲の充足は健全な社会生活とは相容れないこと、等々を考えるように強制されているのである。そして、ここでわれわれが単に性の自由を問題にしているのであれば、それらの不当な干渉に対しては、各個人の生存のあり方について決定するものは各個人であって、それに他者が容喙する根拠は何一つない、といえは足りる。しかし、われわれが問題にしているのは、単に性の自由ではなく、性の自由と社会革命との関連である。よい革命家であるためには、たくさんの愛の営みをする必要があるのではないか、という問いに答えることである。したがって私は、ここで、単に性が自由であることだけではなく、性の自由が社会革命にとって、どのように積極的な理由を持つかを明らかにしなくてはならない。性の抑圧に抗し、性の自由を実践して、ベッドの中の個人的な行為であるたくさんの愛の営みをするのが、現行の支配関係を打破する上でどんな意義を持ちうるのだろうか。

第一に浮ぶのは、どのような形のものであれ、一つの抑圧の形式を受け入れることは、すべての抑圧を受け入れる用意をすることであり、逆に一つの抑圧の形式に抵抗することは、すべての抑圧への抵抗につながるものであって、その意味で、性の抑圧への抵抗は、決して軽視されてはならない、ということである。しかも、性の抑圧は、他の形式の抑圧をきわめて強化するメカニズムを伴っているだけに、ほかの抑圧に対する抵抗以上に、性の自由の実践は特に重要なのである。そのメ

カニズムについて、ゲランは、性の抑圧のもっとも憂慮すべき点は「抑圧されるものの中で叛逆する力を麻痺させる」働きをすることを強調しているが、ライヒは、性科学者として、それをもっと明確な形で説明している。

ライヒによれば、個人は、性本能と道徳の葛藤の重荷に悩まされて、健康な心の構造を失う。神経症にかかる。彼が自分に押しつけている道徳の要求は、「彼の性の——そして、もっとひろい意味での生命力の——欲求をダムのようにせきとめ増加させる。性的能力の発揮をおさえる障害がひどいほど、満足をもとめる欲求と満足をえる能力の不一致はひどくなる。このことは、またも道徳の圧力をつよめずにはおかない。なぜなら、せきとめられたエネルギーをコントロールしなければならぬから」である。その「本能の欲求と道徳による抑圧との解決することのできない葛藤のために」、「彼はなににつけても外部にあって彼を支配してくれるなんらかの法則にしたがって行動しなければならなかった。なにをかながえるにしてもやるにしても、道徳のものさしではかってみなければならなかった」。自分の判断には自信が持てないのである。「だから全知全能の指導者、父のイメージにあこがれるように」なったりする。そのように、性の抑圧は、生命力の萎縮と自律の放棄と權威への従属を生みだし、全社会的な抑圧の構造を一段と強化するように働く。性の抑圧は、支配関係の主要な支柱の一つをなしている。したがって、性の自由の実践、性本能の充足は、単に個人の心身の健康のためではなく、社会革命の視点から見ても重要なことであり、道徳的な規制から、性の本能を断乎として解放したねばならない。

しかし、それに対して、性は凶暴な力であって、何らかの制約を加えることが必要なのではないか、という意見が出されるかもしれない。それについては、ゲランは、ライヒによりつつ、性の本能の充足は「健康の一要素であり、そこからえられる安らぎは、心の平穩、静けさ、生きている喜びをもたらすもの」であって、害悪は快楽ではなくて、快楽が稀にしかなく、それによって快楽の追求が過度のものとなることだ、と主張している。

一方、ライヒは、生体の自律する能力を強調する。「生命力を、よろいのなかに固着された状態から、ときはなす。その直後の結果としては、反社会的な衝動、倒錯した衝動がつよくなり、それとともに、社会への不安と道徳の圧力をますますつよくかんじることになる。しかし」「性をわるいものとするタブーからのがれることができる、より多くのエネルギーが解放されて」「自然な性器的な欲求がめざませられ、あたらしい生命力をもつ」「そうやって完全なオーガズムの満足に達する能力をえて、さらにふさわしい性のパートナーをみつけることができる」、個人の行動全体は驚くべきほど変る。ここで、自律する能力があらわれる。「健康な個人は、おしつけがましい道徳なんかもっていない。なぜなら、道徳によって抑圧される必要がある衝動なんてまったくもっていないから」である。かつては「かんがえることや、することは、みんな無意識の非合理的な動機によっておさえられていたが」、「いまや合理的に行為し反応することが、どんどんできるようになる」。こうして、新しい人間が生まれる。それは、外部の規範を拒否して自律する人間であり、したがって支配構造に敵対する人間であり、自由な発意と合意とに立脚する、新しい社会、

直接民主主義の社会の基礎となる人間である。

さて、以上を通じて、われわれは、性欲を汚れたものとせず、それを自由に充足することが、權威に従属することを拒否する、自由な自律する人間を生みだすことを確認したが、この確認を通してわれわれは、性の解放と社会革命との関連の上で、絶えず提起されがちな主張、ブルードンやレニン以来多くの革命家（あるいは擬似革命家）たちによって考えられた、革命的行動の中にあらゆるエネルギーを集中するために性生活を慎む必要がある、という主張を批判することができ。たとえ革命そのものであろうと、何ものかを犠牲や献身の対象と見なすことは、絶対的な規範を外部に認めることであり、それは必然的に神と司祭を認めること、つまり何らかの階級関係の容認につながるものであって、しかも性の抑圧は（それが革命運動のためであらうと）先にのべたメカニズムによって、權威への従属を生みだすのであるから、その種の禁欲主義は、われわれが真に人間による人間の抑圧の存在しない社会、自由な自律的な個人に、自由な発意と合意とに立脚する社会の建設を目指すならば、排撃すべき対象としなければならぬものである。そうであればこそ五月革命の過程で、ダニエル・コーン・ペンディットは、革命運動が守るべき原則の一つとして、「献身や犠牲のようなユダヤ・キリスト教的な誘惑を実践の中から追放すること、革命闘争は、みなか賭ける必要を感じた賭けでしかありえないことを理解すること」を主張しているのである。

それに、ライヒによれば、禁欲すればエネルギーを集積しようと考えるのは大きな誤りである。むしろ、それは生命力を萎縮させる。したがって抵抗力を減殺する。ライヒはいう。「人は、性生

活を完全に除去して、力を儲けたような気になっている。ブルジョア的な何ものかとして性欲を排除することは、誤りであり、重大な誤りである」。むしろ必要なことは、性の本能を解き放ち、生命力を拡充することである。ライヒは、問題は「若者の性的な反乱を資本主義社会に対する革命闘争に変えることである」と説いているし、ゲランは、「エロティスムは、自由の手段の一つである。それはシモース・ド・ボーヴォワールがいったように、社会に対する、あるいはより正確には、人間に対する人間の抑圧がある社会に対する、権威主義的な社会に対する、敵意ある原理を含んでいる」ので、エロティスムを抵抗の一つの武器と考えることを主張する。したがって、革命のためには、たくさんの愛の営みをする必要があるのである。

そしてまた、われわれは、愛の営みの中に、社会革命に寄与する、もう一つの積極的な意味を見出す。それは、性の交渉という、裸形の人間同士の交渉の場は、他に類例のない、人間を理解するための場であり、人間を理解するためのこの上ない学校である、ということである。われわれが、虚飾を捨てて、じかに、そのようにありのままに人間の姿を見る機会にはほかにない。ライヒは、性の抑圧下の人間は、外界に対して武装していて、自分自身にも周りの環境にもじかにふれることができず、不自然なせのふれあいしかできないのに、性を自由に享受できるようにになると、「じかに自然な仕方であられる能力がまし、自分の衝動とも環境とも面とむかいあうことができるようになる」といっているが、これはきわめて重要な指摘であろう。そうして、われわれは特に性の交渉の場で、素直になり、率直になり、裸になり、人間の真実にふれる。そのように、人間をあり

のままに知ること、他者を知ることによって己をも知り、そのことによってまた一段と他者をも理解することは、権威によらずに社会生活を営んでゆく社会、人間の相互理解の上に成立する筈の、自由な発意と合意とにもつく社会にとっては、欠くことのできない要素である。ここでもまた、ベッドは新しい社会を用意する。

こうして、いくつかの理由を一つ一つ検討してみても、われわれは、革命をするためには性交渉を重ねなくてはならぬ、自由に奔放に愛欲に耽る必要がある、というテーゼを、異論なく受け入れることのできる地点に達した。そしてわれわれは、

愛の営みをすればするほど、革命をしたくてたまらなくなる。

革命をすればするほど、愛の営みをしたくてたまらなくなる。

という五月の壁の言葉も、決して冗談ないしユーモアではなくて、ただ事実の率直な表現であることを理解する。ゲランは、「闘うと同時にキスをしよう」と若者たちに呼びかけているが、それは決して奇矯な呼びかけではない。たしかに彼のいうように、社会革命と性革命、「二つの革命は、唯一の同じものでしかない」のである。

あとがき

いつであったか、はっきりした記憶がないのだけれども、この小著の原稿をまとめて麦社の出版担当者に手渡したのは、四月の半ばごろであったような気がする。その後私は、所用があつて五月の初めから八月の半ばにかけてフランスにいた。私の在仏の目的は、五月革命以後の政治状況を調べるといったものとおよそ違つた性質のものであつたが、しかし三カ月余りの滞在の間には、否応もなくそれに触れざるをえなかつたし、許された時間の範囲で、できるだけ多くの革命運動関係者に会い、できるだけ多くの資料を集めることにも努めた。そして、帰国してまず見ることとなつたのがこのゲラであつた。眼を通してみるまでは、五月革命以後の現地の匂いを嗅いできた私にとって、それ以前に書いた五月革命論が果して適切なものであつたか、という危惧があつた。かなり修正を要するのではないか、という怖れである。しかし、読み終えてみて、それは杞憂にすぎなかつたと感じてゐる。いかにも、現に五月革命に参加した何人かに会い、その後の事情にもかなり通じた今では、私の五月革命のとりえ方は、幾多の愚劣な部分をも伴つていた。五月の現実に対して、いわば頂点の部分をとらえているという事実を認めざるをえないけれども、私は客観的な五月

革命史を書くとしたわけではなく、そこから私たちが日本で行動するに當つて活用しうる何らかの教訓を汲みとろうとしたのであるから、五月の中に最良の部分を見たこと自体は、別に不当なことであつたとは思われない。したがって、ゲラに対して、重大な論旨上の変更を加える必要は改めて認められなかつた。

しかし、別な点ではかなりの不満を感じてゐる。それは特に、この小論を書いていた時の私の「現代」についての理解の仕方に対する不満である。実をいえば、この三、四カ月来、私は日本をも含めて現代を主導している文明、西欧的世界の性格をその源流、つまり西欧の形成期に立戻つて追及してみろという仕事に専念していたのであつて、その結果、私の現代についての理解の仕方、現代文明の主軸をなしている西欧的世界、いわゆる社会主義国をも含めて私にはブルジョア的と思われる世界についての私の理解の仕方は、以前よりはずっと深まりつつあるというか、ずっと明確になりつつあるのであるが、そうした眼で見ると、たとえばこの小著の中にみられる管理社会に対する見方、あるいはそれに対する反抗についての見方、資本主義制度打倒後の新しい世界の方などについては、基本的には異論はないものの、突っこみ方の不足を痛感する。卒直に言えば、できればもう少し新しい視点を加えて書き直したいと考へないでもないが、しかし今はそれをするだけの時間のゆとりがないし、それにまた、そうした不満があるとはいへ、この小著は、これはこれでよからうというのも、正直な感想である。初めにのべたように、五月革命後の現地を見た上でも、五月革命の理解の仕方について、そう途方もない間違ひはしてはいないと思われるからである。

江口 幹 (えぐち かん)

1931年 岩手県に生まれる

主要な翻訳

ゲラン『現代のアナキズム』(三一書房)

ゲラン『現代アナキズムの論理』(三一書房)

ゲラン『エロスの革命』(太平出版)

バクーニン『パリ・コミューンと国家の観念』(三一書房)

ブルードン『連合の原理』(三一書房, 風媒社)

江口 幹 五月革命の考察

1971年10月15日発行

定価 380円

麦 社

東京都豊島区南池袋 1-15-21 田中ビル

振替 東京 144722 電話 (03)987-5765

五月革命以後のフランスについては、別にいくつか書く予定でいるのでここには書かない。ただその印象を簡潔にのべておけば、「六八年五月」は決して消えてしまったのではなく、やはり「一つの初まり」であったと思われるし、あの「初まり」以後、フランスの中で大きく動きつつあるものが確かにあると感じられる。新左翼の量的な力は日本とは比較にならないほど大きく、その中でアナキズムの復活もまた著しい。しかしそれらは、強圧的なファッショ化を進行させるほどに、支配体制を恐怖させるには十分であるとしても、新しい社会をつくりだすほどには強力ではなく、敵しい弾圧にさらされながら、具体的に何をなすべきか、模索と混乱の中にあるといえる。その中から何が生まれるのか、何か期待しうるものがあるのかどうか、簡単に予断することはできない。なお、この小著の中に「現代アナキズム研究」、「永久革命」、「月刊労働問題」などの各誌に私が五月革命について書いたものを部分的に利用していること、また付録としてつけた「性の解放と社会革命」は「情況」の臨時増刊W・ライヒ特集号(七一年五月)に掲載したものの一部であることをお断わりしておきたい。

一九七一年九月

江口 幹